

22日に告示される伊勢市長選・市議選に向けたインタビュー連載「論点を聞く」。最終回の5人目は、医師の遠藤太久郎さん(67)。介護や支援の必要な人が自宅で最期まで過ごすために必要な施策や病院の役割を聞いた。
(聞き手・大島康介)

市立伊勢総合病院の建て替えが決まった昨年九月、「現状に合った規模の病院計画を」と公の場で意見を述べました。個人として医師が発言するのは場違いかもしれませんが、在宅医療に携わる一人として、大きな危機感を持っていました。

在宅医療を伊勢で始めて十五年になります。人生の最終章を迎えた方々の家を訪ねる仕事なので、家族や地域の様子がよく分かります。伊勢は最期まで住み続けるまちになっているのか？ 私は疑問に思います。

伊勢神宮の式年遷宮で、奉獻行事への参加者が少なくなっている。地域、家庭で支える人が減ってきたと多くの人が感じているでしょう。

実際、百歳前後の人を七十〜八十代の人が介護する例もあります。独り暮らしのお年寄りを、子どもや孫が通いながら介護しているケースも多い。家族の余

住み続けられる街に

裕はなくなり、介護の手を求め毎日必死のありさまで。在宅医療では、自宅で過ごしたいという人のために、協力できる人たちの輪をつくらなければなりません。それぞれの地域で暮らし続ける力を確保する施策が「地域包括ケア」です。「ほとんど自宅、たまに施設、まれに病院」というように、介護と医療を繰り返し利用できることが理想の姿だと思っています。しかし今は「亡くなる方の七割が病院です」。

伊勢 2017
市長選 市議選
10.29 投開票

論点を聞く ⑤

いせ在宅医療クリニック 遠藤 太久郎さん(67)



医療や介護の連携が不可欠と話す遠藤さん＝伊勢市御園町高向で

えんどう・たくろう 内科医。2002年から伊勢市御園町高向で「いせ在宅医療クリニック」を営む。50〜60人の在宅患者を往診する。伊勢総合病院では1981〜83年と93〜98年の2回勤務した。三重大学医学部出身。1950年3月、岐阜県郡上市生まれ。

在宅医療をしていると、人の臨終の姿は素晴らしいものだと教えられます。亡くなったばかりの人の表情はほほ笑んでいる。柔らかい肉と温かい血のままで息を引き取るのだから、子どもの寝顔に似ています。生き抜いた結果の死を家族は「ごくろつさま」と褒め、分かち合える。これが地域の文化になればいいと思います。

伊勢市の地域包括ケアは、まだ十分ではない。中でも公立病院である伊勢総合病院は、地域包括ケアの柱にならないければならないはず。退院する人が地域で暮らしているように、開業医や介護事業者などと継続して連携する体制づくりが必要だ。

伊勢総合病院の新病棟建設 伊勢市政で過去最大となる198億円の総事業費で建て替え工事中。2019年1月に入院ベッド200床で開業する計画。地域包括ケアの機能を持つというが、藤本昌雄院長は「新病院の開業前に取り組みを始めることを考えている」と本紙のインタビューに答えた。

＝終わり